

博物館だより

No.149



平成31年4月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都市みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667



▲観覧にお越しいただいた皆さん

**「島山鶴雄展へ大勢のご遺族と
実績発掘の功労者が揃って観覧に」**
本展初日に大勢のご遺族と島山氏の功績を発掘・紹介した元NHK放送博物館長の中田薫氏がお見えになり、公開に花を添えて頂きました。資料に因む様々なエピソードが披露され、貴重な情報収集の場にもなりました。



▲感謝状贈呈の様子 本展は約200点の資料群とよく整理されたご遺族作成の事績ノートがあって実現しました

◆博物館NEWS
みやこの先人島山鶴雄展
関係者をお迎えて公開スタート！
3月9日(土)、企画展「島山鶴雄展」がスタート(21日)まで。公開に先立ち関係者をお招きして開会式を行い、資料寄贈者の島山博明さまへ感謝状が贈られました。その後館員による展示解説も行われましたが、放送技術という情報化社会の基礎作りをした伝説的技術者の存在を初めて知ったという方も多く、未知の先人発掘の好機となったようです。

歴史を学ぼう！文化に触れよう！ 歴史講座受講生募集！



博物館では新年度からの歴史講座の受講生を募集します。

歴史講座には「漢詩紀行講座」「古典かな講座」「古文書講座」「みやこ学講座」の各コースがあります。

受講を希望される方はお気軽に博物館までお問合せください(継続して受講を希望される方の申込みは不要です)。

なお、各講座では毎回、資料代として200円が必要ですのでご了承ください。

講座内容のご紹介

【漢詩紀行講座】

講師 宮原加代子先生

内容 日本の歴史と風土の中で生まれた「日本漢詩」とその詩情を鑑賞します。あわせて漢詩の基礎も学習しますので、漢詩に興味をお持ちの方の参加を歓迎します。辞書・筆記用具をご持参ください。

実施日 毎月第1土曜日
午前9時30分

【古典かな講座】

講師 宮原加代子先生

内容 鴨長明の随筆「方丈記」を鑑賞・手なうらいます。現代にも通じる視点と洞察が味わえる名文をご一緒に学びましょう。

初めの方も歓迎です。筆記用具・用紙などをご持参下さい。
実施日 毎月第3土曜日
午前9時30分

【古文書講座】

講師 外部講師

内容 江戸時代の人が「くずし字」で書いた手紙や日記などを解読します。特にみやこ町に関わる古文書を歴史的な背景についての解説を交えながら読み進めます。

実施日 毎月第2土曜日
午前10時

【みやこ学講座】

講師 当館学芸員

内容 「みやこ町・豊前地方の自然と文化遺産」をテーマに、ゆかりの話題を交え関連学習を進めます。郷土の歴史についての講義はもちろん実際に現地(遺跡やゆかりの地など)を歩き・見て・触れる体験型学習も行います。

実施日 毎月第4土曜日
午前10時

※見学会は開催の都度、連絡します。



▲参考：みやこ学講座における現地見学会の様子
現場・現物からの発見・着想を大切にします

4月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
4月6日(土) 9時30分
- 【古典かな講座】
4月13日(土) 10時00分
- 【古文書講座】
4月20日(土) 9時30分
- 【みやこ学講座】
4月27日(土) 10時00分

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

2月の業務日誌から



24日(日)「第13回三重塔まつり」が開催され多くの方にご来場頂きました。年少少女俳句大会表彰式では、1万近い応募句から入賞した皆さんが表彰されました。ご応募・ご来場頂いた皆さん、本当に有難うございました！

今年の俳句大会から、特選句に俳句研究と制作を生産続けた郷土の先人「小宮豊隆」氏、氏がモデルの漱石小説の主人公名「三四郎」氏の俳号「蓬里雨」を賞の名に冠し、表彰することとなりました。地域ゆかりの文芸賞の名として「愛顧下さい！」

★小宮豊隆賞(優れた観察・研究句)
はつひのでみんなのちきゆうがまっかたな
与原小一年 吉村 咲哉

里山や竹伐る祖父の背は低し
伊良原中三年 中嶋 柊

★三四郎賞(青春情景句・成長句)
北風に吹かれ動じずルシヤナ仏
行橋中二年 丸山 幹生

★蓬里雨賞(伝統句・蕉風句)
菜の花の沖に広がる海の青
犀川小六年 西小野慶斗

手を打てばキジが飛び立つ野原かな
育徳館中一年 高山 昊也

みやこの歴史発見伝 115

よしだますぞう
吉田増蔵(その九)

「吉田増蔵をめぐる二つの学校について」

育徳館高等学校

育徳館高等学校は、町内にみられる唯一の高等学校です。歴史と伝統に培われた学校は、昨年、二六〇周年を迎え、校内には県内最古の学校建築

「新元号」と「新入生」

今年も、町の各所で新入生を見かける季節になりました。特に今年、平成最後の卒業生となった児童、生徒等が、新元号の幕開けに向かって新たなスタートに立つという稀に見る機会に恵まれ、新入生にとって、特に思い出に残る門出になりそうです。

今年も、町の各所で新入生を見かける季節になりました。特に今年、平成最後の卒業生となった児童、生徒等が、新元号の幕開けに向かって新たなスタートに立つという稀に見る機会に恵まれ、新入生にとって、特に思い出に残る門出になりそうです。

今回は、みやこ町にある吉田増蔵ゆかりの二つの学校についてご紹介いたします。



▲史料No.1:完成直後の「大森先生之碑」(昭和10年)
*大森先生記念碑絵葉書より



▲母校の歴史を学ぶ授業風景

である県指定文化財「思永館」をはじめ、岩垂邦彦(NECの創業者)や、小宮豊隆(夏目漱石門下、ドイツ文学者)など、学校ゆかりの人物の石碑等を見ることが出来ます。吉田増蔵もこの学校で学んだ一人として名を連ねていますが、校内の石碑にその名が刻まれていることはあまり知られていません。史料No.1は、昭和十年に除幕式が行われた大森藤蔵(一八六七〜一九二九)校長の顕彰碑です。この石碑の建立にあたり、吉田増蔵は撰文(碑文などの文章を作成すること)を担当し、碑文には漢

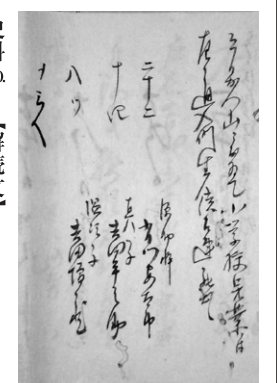
文調で大森校長の履歴や人柄などがまとめられています。詳細を見ると、大森藤蔵校長は豊津中学校卒業後、東京帝国大学(現在の東京大学)に入学。卒業後は、第五高等学校(現在の熊本大学)の教授などを務めて

いきましたが、明治三十三年(一九〇〇)に豊津中学校校長に就任。非常に質素で誠実な人柄であったため、教員の信頼も厚く生徒から慕われ、二十五年にわたり校長を務めながら母校の発展に尽力したという内容が確認出来ます。碑文の末尾には「昭和拾年九月 宮内省御用掛正五位勲四等吉田増蔵撰並書」の文字が刻まれています。

また吉田増蔵は、昭和十二年(一九三七)五月、豊津中学校創立五十周年に際して記念事業の一つとして制定された校歌の作詞にも携わっています。漢学者らしく漢詩を彷彿とさせる歌詞が若干、難解であったとも伝えられています。その後、昭和三十二年(一九五七)五月、創立七十周年記念事業に際して現在の校歌が制定されますが、作詞は小宮豊隆によるものです。

黒田小学校

みやこ町勝山黒田にある黒田小学校は校内に国指定史跡の橘



史料No.2「解説文」

今日かつ山ニおゐて小学校開業ニ付、左之通入門生徒召連罷出候
二十二 源助倅 有門安太郎
十四 直八子 吉田平之助
八ツ 温次子 吉田増蔵
メ三人

(上田村戸長「明治第六癸酉年公私御用日記簿」)

塚古墳が所在しており、町内外から多くの見学者が訪れます。この学校は、現在の勝山神社に住んでいた胎蔵院という山伏の湛然が佐藤中と名前を改め、明治六年(一八七三)四月、自宅を校舎として京都郡第三十四区(上黒田・中黒田・下黒田・上田・箕田・長川・宮原・浦河内の八村で構成)の小学校を開いたことがその前身と伝えられています。史料No.2は、学校開業当時の入学者を記載した記録ですが、三名の「新入生」の中に八歳の吉田増蔵の名前をみるこ

とができます。

吉田増蔵は、明治十二年(一八七九)二月に現在の行橋市上

稗田に村上仏山が開いた塾「水哉園」に十四歳で入門したことが確認できていますが、この記録から少なくとも八歳の頃から学校に通っていたことが確認できました。この学校の教師を務めた湛然も同じく水哉園に学び、その父親である智証は、村上仏山の日記でたびたび名前が出てくる人物で、漢学の素養があったといわれること等から、親交の深さがうかがえます。

「昭和」・「平成」から新元号へ

吉田増蔵が考案した元号「昭和」が終焉して三十年以上の月日が経ち、さらに彼が考案した称号・名前をもつ天皇陛下の退位が迫った今、この機会に彼の功績と併せて、学校や地元との関わりを改めて見直し、次世代へと永く大切に語り継いでゆきたいものです。

【井上信隆】



▲母校の「先輩」の功績を学ぶ授業風景